

明日は中秋の名月だそうだ。八年ぶりに満月と一致するという。そんなニュースを聞きながら、昼間に虫干しした着物を畳んでいた。柄は武蔵野。

あの日、お月見の薄をとりに行かなかったことを今も少し悔やんでいる。

わたしが子供だった頃、母もおばちゃんも毎年十五夜の夕暮れになると、近くの野原に薄をとりに行ったものだ。二人とも氏神様に守られた田園の中で山遊びをしながら子供時代を過ごしたためか、四季折々の行事を大切にしていたものだった。

もう十四年も前になるのだろうか。あの年の秋、わたしは幼い娘を連れて実家に帰っていた。いつものようにおばちゃんが玄関を開けて母に声をかける。

「十五夜の薄、とりに行かない？」

薄とりか、懐しい、と思つた。おばちゃんはわたしの実家の隣に住んでいて、母の親友で、その息子はわたしの幼なじみだった。わたしの花嫁衣裳を選ぶ時も、母と一緒に来てくれた、第二の母のような人だった。母もおばちゃんも、子供が巣立つてからはお月見のお供えもあまりすることはなくなり、薄をとりに行くのも久しぶりだっただろう。

でもその日、幼い孫を迎えて夕食の仕度をしていた母は、

「んー、今年はやめとくかな。」

と断わつた。おばちゃんは、

「分かった。んじや、私、今から行ってくるわ。」

と、気にした様子もなく帰っていった。ただそれだけの何気ないやりとりが、今も胸から離れない。あの日、おばちゃんは一人でどこで薄をとつたのだろう。どんなお月見をしたのだろう。

その前の年からおばちゃんが病氣と闘っているのは知っていた。でも、弱つた姿を見たことはなかったし、いつも通り明るいおしゃべりをしていたので、病状が進んでいるとは思わなかった。しかし実際は、体が辛い日は家から出なかつたのだろうし、泣いたり悲観的になっている姿よりも普段通りの明るい姿を親しい人には覚えていてほしかつたのだろうと今になって思う。

あの十五夜が、おばちゃんの最後のお月見だった。あの年の冬、急に容態が悪くなつたおばちゃんは旅立ってしまった。悲しかった。十年以上経つた今もなお悲しい。できるなら、子供に戻つて、野原の秋草をかき分け、おばちゃんと母と一緒に薄をとりたい。母も今、おばちゃんと同じ病を患っているのだ。

今年の十五夜は残念ながら雲が垂れこめ、中秋の名月を望むことはできなかった。真夜中、日付けが変わつた頃、外に出てみると、いつしか夜空の雲は薄くなり、その隙間から、天高くに小さく、そして眩しいほどの白く丸い月が冴え冴えと光っていた。